一人ひとりの可能性を引き出す指導の工夫
～　子どもが自信を持ち、達成感を味わう活動を通して　～

教育実践研究科　教職実践専攻　教職実践基礎領域
大西　百恵

Ⅰ　はじめに

私が教職大学院に進学した理由は大きく２つある。１つめは、小学校の教員になりたいという強い思いがあったためである。私は学部の時、三重県津市の小学校でボランティアを行っていた。その経験から、子どもの早期発達段階における教育の重要性を強く感じた。そのため、子どもの人格形成の土台を創る小学校教員の使命にやりがいを感じ、小学校教員になりたいという想いが強くなった。そのため、小学校免許取得コースへの進学を決めた。２つめは、教師としての専門性・教育技術を身につけるためである。私は教育学部出身ではないため、教育に関する知識や経験が十分とはいえないと感じていた。そのため、学部卒業後すぐに教職に就くことに不安を感じ、より実践的に専門性を身につけることができる教職大学院への進学を決めた。教職大学院は「理論と実践の融合」を掲げ、教室で学んだ理論を実際の学校現場で実践することができるため、学びが机上の空論で終わるのではなく、自分の技術として身につけることができた。

また、大学院での３年間で多くの貴重な出会いがあり、たくさんの方々に支えられて大学院での学びを続けることができたことも非常に大きな財産である。

本報告では、これまでの実習での学びを省察し、子どもの可能性を引き出す指導の工夫について私なりの考察を行っていきたい。

Ⅱ　主題テーマ設定の理由

１　大学でのボランティア経験から

私は大学４年生までの３年間、小学校でボランティア活動を行っていた。そこで出会った子どもたちは、瞳をキラキラと輝かせ、あらゆるものに好奇心を示す姿が見られた。私は、この姿から子どもたち一人ひとりには無限の可能性が秘められており、その可能性を引き出すことが教師としての大切な役割であることを確信した。しかし、子どもたちの多くは、何かに取り組もうとする前に、「私には無理」「どうせ僕には出来ない」という言葉を口にし、やってみる前から自分には「できない」と決め付けてしまい、自分で自分の可能性を諦めてしまっている場面があるように感じた。私はこのような事態を憂いながらも、どうすれば子どもたちの可能性を引き出すことができるか分からず、もどかしい思いをしていた。

２　現代の子どもたちの姿から

中央教育審議会の答申[i]は、「近年、（中略）学習意欲や就労・勤労意欲の低い青少年が増えつつあるのではないかという懸念が生じている。また、学習や労働といった具体的な対象への意欲の減退だけでなく、成長の糧となる様々な試行錯誤に取り組もうとする意欲そのものが減退しているのではないかとも懸念されている。」と子どもたちの様子を指摘し、その背景には「青少年の自己肯定感の低さや『大人になりたくない』という現状への安住志向、慢性的な疲労感やあきらめ、集中力や耐性の欠如が見られる」と述べている。また、（財）日本青少年研究所による「小学生の生活習慣に関する調査[ii]」では、東京、北京、ソウルの小学校４～６年生を対象にした調査で以下のような結果が出ている。

○　自分のことは自分で決めたい

	東京	北京	ソウル
1　そう思う	54.9	69.4	63.3
2　どちらかというとそう思う	27.5	19.6	24.5
3　どちらかというとそう思わない	12.3	5.2	7.5
4　そう思わない	4.5	2.6	3.2
無回答	0.8	3.3	1.4

○　将来のためにも、今、がんばりたい

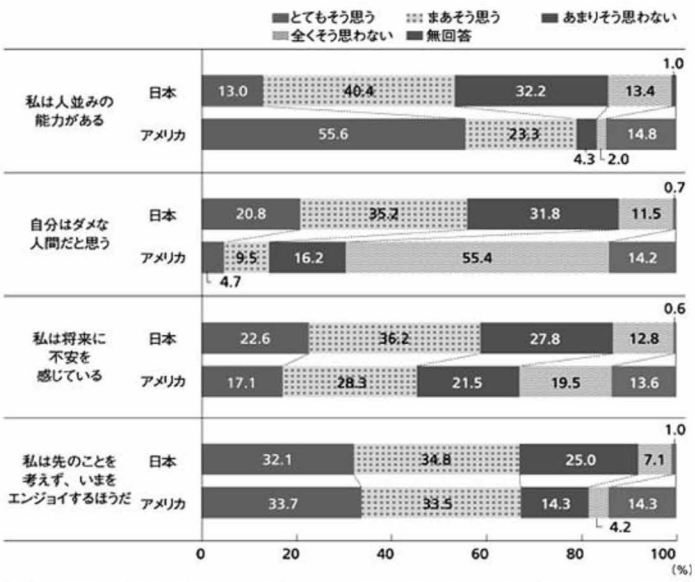
	東京	北京	ソウル
1　そう思う	48.0	74.8	72.1
2　どちらかというとそう思う	29.2	16.9	20.5
3　どちらかというとそう思わない	14.8	2.8	4.3
4　そう思わない	7.0	2.0	1.5
無回答	1.0	3.6	1.6

この調査結果からも分かるように、日本の子どもたちは、自分自身に対する肯定的な評価が低いといえる。

また、自分自身に対する肯定的な評価は年を重ねるにつれて低下していくことが分かる。下記のグラフ[iii]は「中学生・高校生の生活と意識調査報告書」の結果である。このグラフからも、日本の中学生は自己肯定感が低く、特に、「自分はダメな人間だと思う」という問いに対し、半数以上が「そう思う」と答えている。

以上のように、現代の子どもたちの特徴として、自己肯定感が低く、自分に自信がないことが挙げられる。

図1　自己肯定感に関する日米比較



＊2008年9～10月実施。対象は日本、米国、中国、韓国の中学生と高校生。日本は中学生807人、高校生1,210人。上図では日本と米国の中学生の結果のみ掲載している

しかし、これから未来ある子どもたちが小学校段階からこのように自分の価値を低く見ているというのは憂慮すべき事態であり、非常に残念なことである。私は、一人でも多くの子どもたちに「自分にもできるんだ」「やればできるんだ」という自信をつけさせ、子どもの可能性を引き出す指導を行っていきたいと考え、実習の主題テーマとした。

Ⅲ　実習の記録

教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ（以下、実習Ⅰ・Ⅱと表記する）は、学校サポーターとしてお世話になっている岩倉市立A小学校で実習させていただいた。教師力向上実習Ⅲ（以下、実習Ⅲと表記する）は名古屋市立B小学校で実習をさせていただいた。

1　教師力向上実習Ⅰ

実習Ⅰでは、2012年4月23日から5月18日までの4週間、4年生で実習をさせていただいた。

(1)　学校の実態

A小学校は、児童約850人が在籍する、岩倉市の中で一番規模の大きな小学校である。創立は明治6年と、とても歴史のある学校である。そのため、親子3代にわたってA小学校に通っているという家庭も多く見られる。1952年に建築された木造校舎は2011年7月に取り壊されたが、その際に開かれた「木造校舎とのお別れセレモニー」では、地域に住む卒業生が思い出を語るなど、地域に愛されている学校である。以前から学区に住んでいる家庭の児童が多いが、新たな住宅や大型の分譲マンションが建てられ、転入してくる児童も多くなっている。A小学校の児童は、明るく、元気な子どもが多く、放課には男女仲良く外で遊ぶ姿も見られる。

(2)　実践の記録

【実践1】　今日のスケッチ

ア　今日のスケッチのねらい

子どもたちの姿から、何か代表として立候補を募る機会がある時などに、私が「やってみない？」と声を掛けると、「私には無理だよ」「僕には出来ないな」などの返答が返ってくる場面が見られた。しかし、そう答えた子どもたちの中には「やってみたいけど、失敗したらどうしよう」と悩んでいる表情をしている子どももいた。このように行動する前から、「自分にはできない」と思い込んでしまったり、失敗を恐れるあまり行動に移せない子どもたちは、自らの可能性の扉を知らないうちに閉じてしまっていると考えた。したがって、失敗を恐れず、何事にも進んで挑戦することができる意欲を育むために、「私にもできるんだ」「僕だってやればできる」という気持ちを持つことで自分に自信を持ち、何事にも前向きに取り組む姿勢を身につけさせることをねらいとした。

イ　実践の内容

学級活動の授業で生活面・学習面の目標を決めた後、2週間その目標に向かって取り組む。毎日、目標に対して自分がどのくらい努力することができたか、目標に近づくことができたかを振り返らせる。

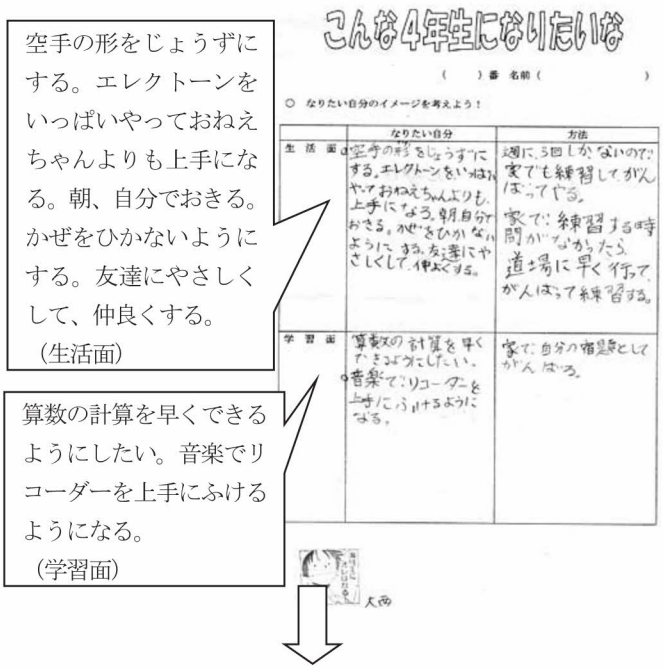
〔取り組み1〕　なりたい自分をイメージする

4年生に進級し、自分はどのような4年生になりたいのかを子どもにイメージさせ、ワークシートに記入させる。（資料1）

〔取り組み2〕　目標を設定する

先ほど記入したワークシートを基に、生活面・学習面での目標をそれぞれ1つ決め、目標を達成する手立てを考え、ワークシートに記入させる。2週間、目標を達成するために頑張るよう意欲付けを行う。（資料2）

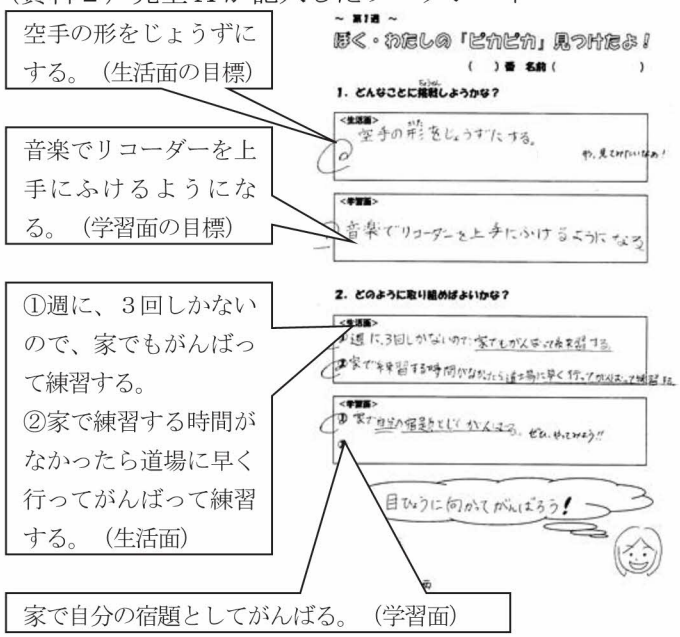
（資料1）児童Aが記入したワークシート



空手の形をじょうずにする。エレクトーンをいっぱいやっておねえちゃんよりも上手になる。朝、自分でおきる。かぜをひかないようにする。友達にやさしくして、仲良くする。
（生活面）

算数の計算を早くできるようにしたい。音楽でリコーダーを上手にふけるようになる。
（学習面）

（資料２）児童Ａが記入したワークシート



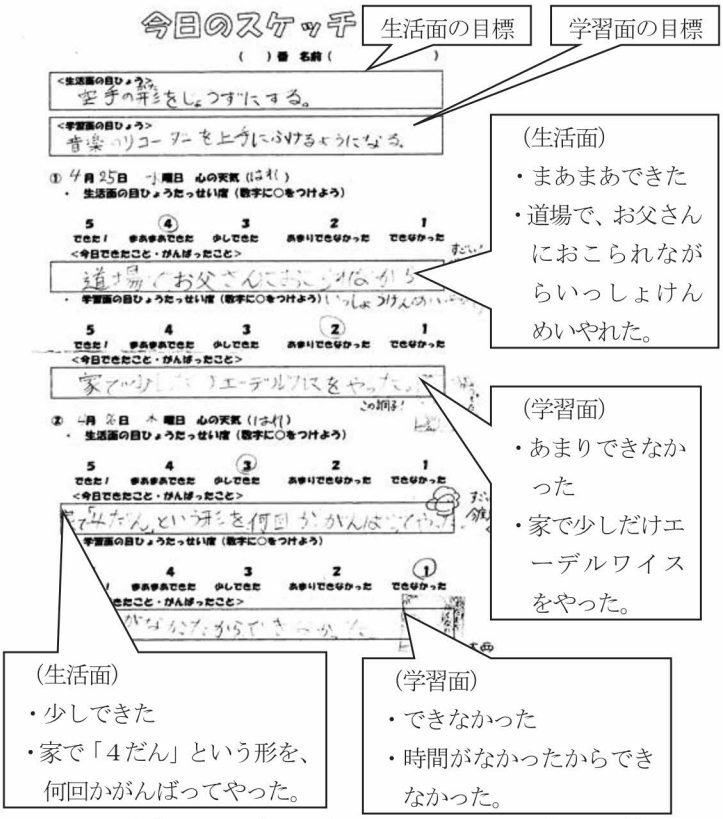
〔取り組み３〕　目標に取り組む

２週間、自分の設定した目標が達成できるように各自で取り組む。

〔取り組み４〕　振り返りを行う

朝の会や給食後の時間を利用して「今日のスケッチ」と題したワークシートに、毎日、目標に対する達成度とどのようなことを頑張ったのか記入する。（資料３）

（資料３）児童Ａが記入した「今日のスケッチ」



※　「今日のスケッチ」のワークシートは１枚に２日分書くようになっている。

〔取り組み５〕　新しく目標を設定する

２週間、同じ目標に向かって取り組んだあと、まとめとして「ピカピカの木」（後述）を作る。その後、これまでの反省を生かし、新しい目標を各自が設定する。そして、次の２週間は新しい目標を達成できるように各自で取り組むようにする。この実践は２週間を１クールとするため、実習中、「目標設定→目標に向かって取り組む→まとめ（ピカピカの木）」というサイクルを２回行うことができた。２クール目も１クール目と同様の方法で実践を進めるが、目標設定に関しては、１クール目の反省から、生活面・学習面共に学校生活に関する目標を決めること、毎日取り組むことができることを条件とした。

【実践２】　ピカピカの木

ア　ピカピカの木のねらい

２週間、生活面・学習面の目標に向かって取り組んできた成果を、自分自身で自覚することで「がんばれば達成できるんだ」「私にもできるんだ」という自信を持たせること、他者が頑張っている姿を知ることで、お互いの努力を認め合い「私もがんばろう」という意欲を強くすることをねらいとした。

イ　実践の内容

学級活動の授業で、２週間の「今日のスケッチ」を振り返り、設定した目標に対して自分がどのくらい努力することができたか、どのくらい目標を達成することができたかを確認する。

〔取り組み１〕　「ピカピカの木」を提示する

ピカピカの木を提示し、設定した目標に対してできるようになったことを「ピカピカの葉」に書いて木に貼り付けることを知らせ、意欲付けを行う。

（写真１）ピカピカの木



〔取り組み２〕　２週間の振り返りを行う

「今日のスケッチ」を見て、２週間の自分の取り組みを振り返り、ワークシートを記入する。（資料１）

〔取り組み３〕　グループで交流する

ワークシートを基に、２週間で自分ができるようになったこと、努力したことをグループで交流し合う。

〔取り組み４〕　「ピカピカの葉」を貼る

２週間で自分ができるようになったことを「ピカピカの葉」に記入し「ピカピカの木」に貼る。

〔取り組み５〕　「ピカピカの木」鑑賞会を行う

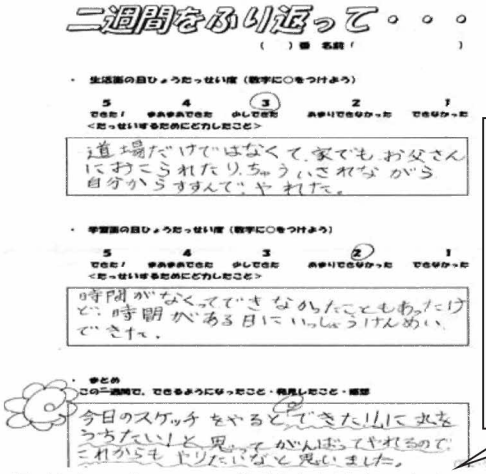
完成した「ピカピカの木」を鑑賞し、感想を書く。このように「ピカピカの葉」を鑑賞しあうことで、学級の仲間がどのような目標を立て、どのようなことが

できるようになったのかを知ることで、「自分もがんばろう」という意欲につながると同時に、他者を認めることにもつながると考える。（資料２）

〔取り組み６〕　「ピカピカの花」を咲かせる

２クール目が終わった際のまとめとして「ピカピカの花」に１クール目と同様、目標に対して２週間でできるようになったことを記入し「ピカピカの木」に貼る。全員が貼り終えたら「ピカピカの木」の鑑賞会を行う。２クール目を花にしたのは、１クール目との区別が一目で分かること、１クール目のまとめの授業で「ピカピカの葉」を作った際に児童から「花がいい」という意見が出たためである。（資料３）

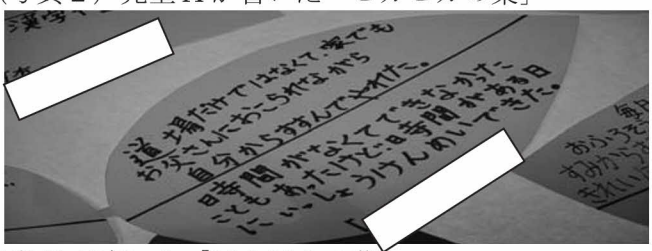
（資料１）児童Ａの振り返りワークシート



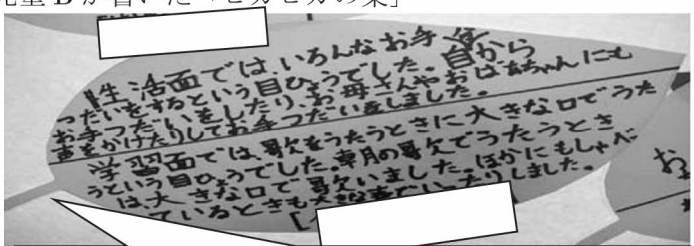
今日のスケッチをやると「できた！」に丸をうちたい！と思ってがんばってやれるので、これからもやりたいなと思いました。

児童Ａは毎日、一生懸命目標に向かって取り組んでいる姿が見られた。毎日のように「昨日、道場で形の練習しっかりやった」「昨日、家でも練習したよ」「もうすぐ、空手の大会があるから頑張る」などと、私に教えてくれた。その時の児童Ａの笑顔は大変輝いていた。得意なことをさらに伸ばすために、自分から進んで取り組もうとする意欲を育むことも、可能性を引き出す大きな要因であると感じた。

（写真２）児童Ａが書いた「ピカピカの葉」



児童Ｂが書いた「ピカピカの葉」



（この葉を見た児童Ａの感想）

○○さんのピカピカの葉にはたくさんお手伝いをしたなどたくさんかいてあったのですごいなと思いました。

（資料２）　ピカピカの木を鑑賞した児童の感想

児童Ｃ：みんないろんな目ひょうがあって目ひょうにむかってしっかり努力しているんだなあと思いました。みんな、すこしずつできることがふえていて、わたしもがんばらなくちゃと思いました。

児童Ｄ：みんないろんな目ひょうがあってすごいなと思いました。ぼくももっといろいろなことにちょうせんしてできるようになりたいです。

児童Ｅ：みんな、毎日毎日色々なことをしてがんばっていました。私は、それを見て今い上にがんばってみんなにまけないぐらい目ひょうに近ずきたいです。そして、みんなみたいに自分からすすんでできるようにすることをたくさんふやしていきたいです。お友達は、みんなちがう目ひょうだけど、自分の目ひょうにどんどん近くと思ってやったらお手つだいもお勉強も、どんどんすすんでいくと思いました。

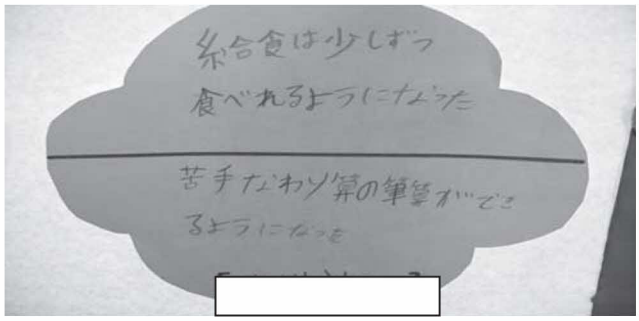
※　表記は児童の文章のまま引用した。

（写真３）「ピカピカの木」

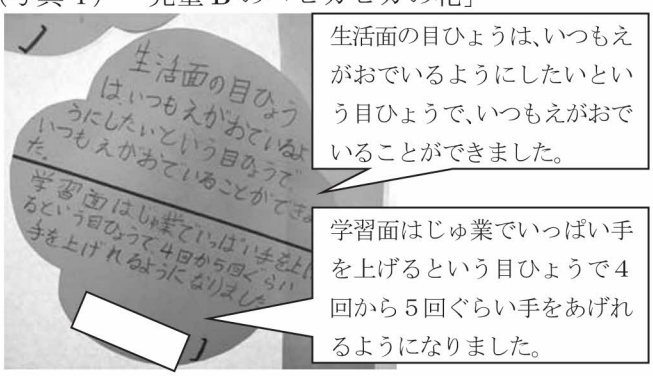


※　木は学級に掲示し、いつでも子どもたちが見えるようにした。

（写真４）児童Ｆの「ピカピカの花」

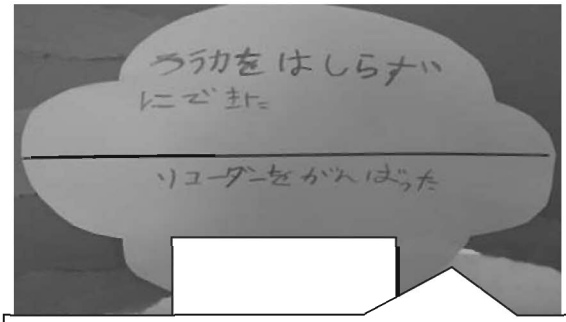


（写真４）　児童Ｂの「ピカピカの花」



児童Ｂはおとなしい性格であるが、この目標を立ててからは笑顔で友達と接することが多くなった。私が、「Ｂさんの笑顔は素敵だね。みんなを明るくするね。」と言うと、嬉しそうにはにかみ、とびっきりの笑顔を見せてくれた。

児童Ｇの「ピカピカの花」



（このピカピカの花を見た児童Ｈの感想）
○○くんのぴかぴかのはなをみてろうかをはしらないことをかいていました。それで、ぼくがみたところでははしっていなかったです。だからぼくもがんばりたいです。ピカピカの木を見てみんな目ひょうにむかってるからがんばりたいとおもいました。

（写真５）「ピカピカの木」



（資料３）　ピカピカの木を鑑賞した児童の感想

児童Ｉ：○○さんのピカピカの花にかいてあった目ひょうは、大きな口を開けてあいさつするという目ひょうだったので、朝、あいさつをするとスッキリするので、自分できめた目ひょうだけではなくて友達の目ひょうにむかってもがんばりたいです。

児童Ｊ：○○さんの音読のきもちをこめてがんばって読むということがわたしもまけたくないなと思いました。○○さんのようにわたしも元気よく今日あいさつしたいと思います。

児童Ｋ：（略）ぼくもみんなみたいに、りっぱな目ひょうを立てれるようにがんばる。そして、その目ひょうをたっせいできるようにがんばる。

児童Ｌ：「できないことができるようになった」ということが書いていた人が多かったので、いろいろな事にちょうせんしょうと思った。

※　表記は児童の文章のまま引用した。

２　教師力向上実習Ⅱ

実習Ⅱでは、2012年9月12日から10月5日までの４週間、４年生で実習をさせていただいた。

(1)　実践の記録

①　算数　単元「２けたでわるわり算の筆算」

ア　本単元における指導の工夫

〔工夫１〕　学習にストーリー性を持たせる

指導教員から、忍術で割り算を解く方法を教えていただいた。そこで「割り算忍者」のキャラクターが、「割り算忍者見習い」である４年４組の児童に、割り算の筆算を簡単に解くための「忍術」（割り算の解き方）を教えに来たという設定を作り「忍術」をすべて修得し、割り算の筆算を解くことができるようになったら一人前の「割り算忍者」になれるというストーリーを作った。このような設定があることで、算数や割り算に苦手意識を持っている児童も楽しんで授業に取り組み、「できた」「解けた」という喜び、達成感を味わわせることで、算数に対する苦手意識を和らげることができないかと考えた。また、「楽しい」と感じることで、もっと頑張ろうとする意欲が生まれ、可能性を引き出すことにつながると考えた。

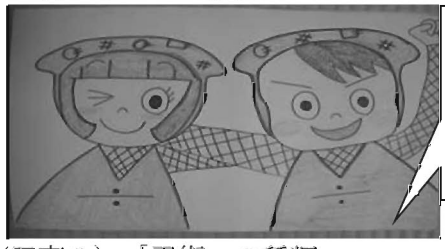
〔工夫２〕教材・教具を工夫する

学習内容の定着を助け、見やすく、はっと目を引く教具になるよう工夫した。また、見た目にも楽しい教具になるよう心がけ、子どもたちの学習意欲を引き出すことをねらいとした。

イ　実践の内容

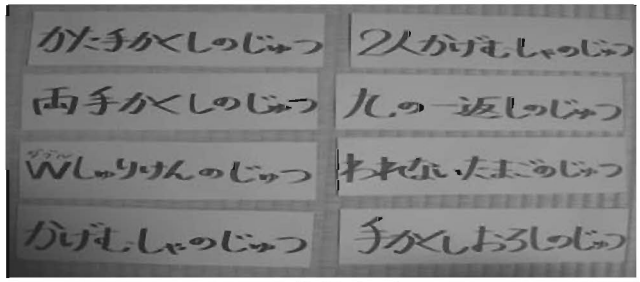
（取り組み１）　学習にストーリー性を持たせる。

（写真１）「割り算忍者」キャラクター



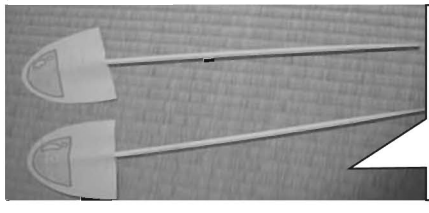
割り算忍者
左：わりちゃん
右：さん君
子どもたちから大人気！

（写真２）「忍術」の種類



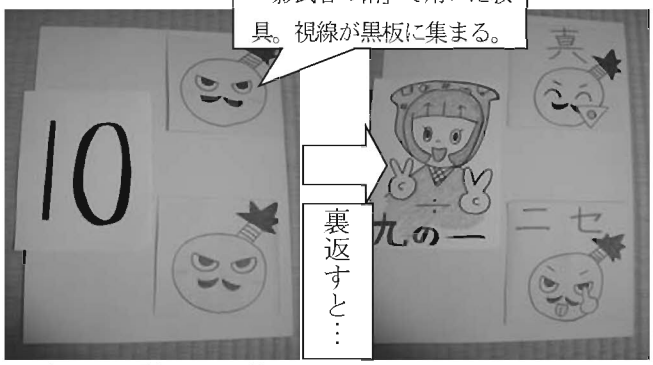
（取り組み２）　教材・教具を工夫する。

（写真３）　指差し棒

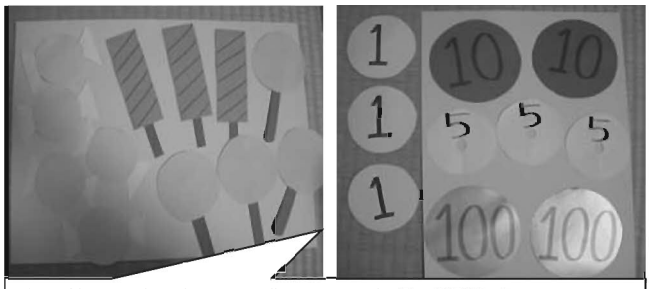


「忍術」を発動するときに使用する指差し棒。どこを指で隠せばよいのか一目で分かる。

（写真４）「影武者の術」で使用した教具



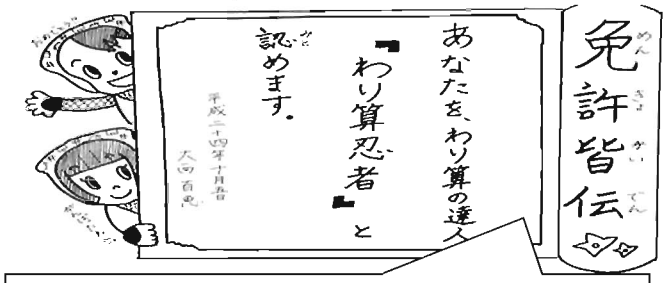
（写真５）「飴」と「お金」



割り算の意味を考える授業で用いた教具。実際に子どもたちに黒板で操作させた。

また、毎時間「割り算忍者」のキャラクターの絵とこれまでに学習した「忍術」を黒板の右上に貼るようにし、学習内容を一目で分かるようにするだけでなく、問題につまづいたときは振り返りができるようにした。さらに「忍術」のプレートが増えていくことで、「こんなに勉強したんだ」という自信にもつなげるようにした。新しい内容を学習した後は、「わりちゃん・さん君からの挑戦状」と題した学習プリントを配布した。（全８枚）実習最終日にはこれまでがんばって割り算の筆算を解いた証として、全員に「免許皆伝」を行い、「割り算忍者」と認定した。（資料１）

（資料１）　「割り算忍者」の「免許皆伝」



一人ひとりの名前を入れて渡した。

〔取り組み３〕　子どもが活動する場面を作り出す

計算の過程で児童が声を出す場面を多く設定したり、筆算のアルゴリズムを何度も確認し、アルゴリズムを唱えながら自分で解き方を確認する活動を取り入れた。また、隣同士で考えを話し合い、発表させたりする活動も行った。前時の復習や学習内容を確認する場面では、児童を前に出し、筆算の方法を説明させた。その際は、集中して授業に取り組めていない児童を中心に指名し、授業へ向かう姿勢を作った。本単元では、教える時間が主であったため、少しの時間でも声に出したり考えさせるなどして「授業に参加している」という意識を持たせるようにした。

②　音楽　単元「アンサンブルの楽しさ」

ア　本単元における指導の工夫

〔工夫１〕　楽曲に対する興味をもたせる

楽曲が作られた当時の演奏の様子や、楽器を紹介する際、実際に私がトランペットを吹くなどすることで、これからの学習に興味を持たせることをねらいとした。

〔工夫２〕　グループのめあてを考える

２グループにわけ、グループごとにアンサンブルの練習を行った。その際、グループごとに演奏のめあてをリーダーを中心に話し合って決め、めあてに近づくよう練習することで、自分たちが演奏を作り上げていくんだという意欲を高めることをねらいとした。

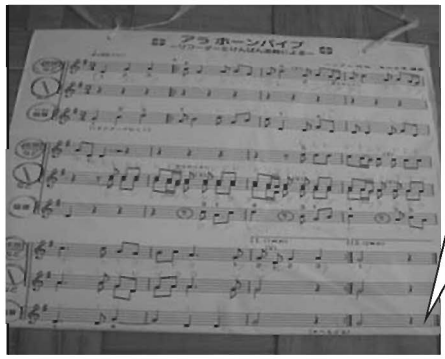
〔工夫３〕　グループの良い所を見つけあう

単元の最後に発表会を行う。その際、互いのグループの演奏を聴き合い、良い所を見つけ合うことで、自分たちの演奏に達成感を持たせることをねらいとした。

イ　実践の内容

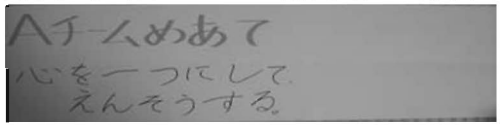
〔取り組み１〕　グループのめあてを考える。

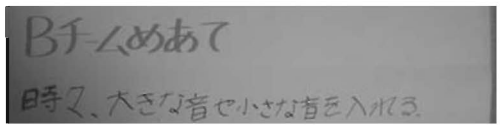
（写真１）　グループ練習の際に用いた拡大楽譜



グループでめあてを決める際や、練習をするときに、用いた拡大楽譜。後ろをダンボールで補強し、書き込むことができるようにした。

（写真２）各グループで話し合って決めためあて





〔取り組み２〕　発表会を行う。

グループごとに発表会を行う。互いのグループの演奏を聴き合い、良いところを見つける。（資料１）

（資料１）

達成感を味わうことができた児童の感想

児童Ｎ：練習の時はさいごとくりかえしが上手にできなかったけど、本ばんはびしっときまったのでうれしかったです。

児童Ｍ：しっかりけんばんハーモニカの音をきいてたいみんぐをあわせてえんそうした。自分てきにはすごくよくできたと思う。

めあてを意識して演奏を聴くことができた児童の感想

児童Ｏ：Ａチームのめあて「心を一つにしてえんそうする」というめあてでできてみんなでリズムをとりながらできたと思う。

互いのグループの演奏の良い所を見つけることができた児童の感想

児童Ｐ：２だん目のとちゅうからけんばんハーモニカとリコーダーのいきがあっていた。

児童Ｑ：Ａチームは音も大きく、とてもまとまっていた。音と音の重なりもきれいで、聴いていたここちよかった。

児童Ｒ：みんながまとまってえんそうできていた。一人一人がいっしょうけんめいふいていた。音がきれいだった。

３　おすすめの本の実践

(1)　ねらい

子どもたちの姿から、自分の興味や関心があるものは進んで学んだり、より深めようとする姿が見られるが、そうでないものに対しては関心が薄いように感じた。もともとの興味・関心のあることを深めることはもちろん、今まで関心が薄かった分野にも触れる機会を設けることで、今まで自覚していなかった自分の興味・関心の対象に気付くことができ、可能性の幅も広がると考える。そこで、おすすめの本として様々な分野の本を紹介をすることで、子どもたちの読書領域が広がり、視点を広げていくこと[iv]をねらいとし、実習Ⅰ・Ⅱを通して実践した。

(2)　実践の記録

①　「おまえうまそうだな」　宮西達也作・絵

（方法）読み聞かせ

お話を知っている子どももいたが、その子も真剣に聞くことができていた。絵本は年齢に大差なく子どもたちの心に届くことがわかった。

②　「金子みすゞ詩集百選」　金子みすゞ著

（方法）ブックトーク

反応が薄いように感じたため、子どもに尋ねてみたら、３年生のときに詩について調べる学習があり、知っている詩が多かったとのことだった。もっと紹介の仕方を工夫すれば、子どもたちの活動の場を作ることができたかもしれない。

③　「モモ」　ミヒャエル・エンデ作

（方法）ブックトーク

時間の花を見せながら紹介すると、多くの子が興味を示し、「読んでみたい」という子どもたちの関心が高くなったように感じた。

④　「地球の食卓」　ピーター・メンツェル、フェイス・ダルージオ著

（方法）　ブックトーク

昨日の晩御飯を想起させた後、各国の写真を見せた。子どもたちは、みな興味を持って写真を除きこんでいた。自由な発言の中には、驚きの声が多く、日本を始めとする先進国は食糧事情が恵まれていると感じた子どもも多くいたと感じる。

⑤　「とんぼのうんどうかい」　かこさとし著

（方法）　読み聞かせ

運動会が近いことからこの本を紹介した。小さい頃に読んだことがある子もいたが、みな楽しそうにお話を聞いていた。絵本は何回読んでも子どもたちの心に響くものであり、ずっと記憶に残るものであることを感じた。

４　教師力向上実習Ⅲ

実習Ⅲは、2012 年 11 月 12 日から 22 日までの２週間、５年生で実習をさせていただいた。

(1)　学校の実態

Ｂ小学校は児童約 150 人が在籍する小規模な学校である。そのため、学校全体が一つの大きな家族のような、温かい雰囲気に満ちた学校である。子どもたちは、素直で明るく、誰にでも笑顔であいさつが出来る児童が多い。読書活動に力を入れており、地域の方や保護者の方がボランティアで本の読み聞かせに来てくださる。学校の隣には地域と共有の児童遊園があり、低学年の児童は放課等、そこで元気よく遊ぶ姿が見られた。また地元企業との連携も充実させ、地域との関わりも深い学校である。

(2)　実践の内容

実習Ⅲでは、授業実践８時間、本の紹介を５回、実践させていただいた。

①　おすすめの本の紹介

朝の読書タイムの時間に本の紹介を行う。指導教員のご配慮で１年生から５年生の学級で本の紹介をさせていただくことができた。

学年	紹介した本	関連書籍として紹介した本
1	「いいから　いいから」 作・絵：長谷川義史	「いいから　いいから　2」 「いいから　いいから　3」
2	「はじめてのおつかい」 作：筒井頼子　絵：林明子	「とん　ことり」
3	「おまえうまそうだな」 作・絵：宮西達也	「きみはほんとうにすてきだね」」 「いちばんあいされているのはぼく」
4	「だじゃれ日本一周」 作・絵：長谷川義史	「いいから　いいから」のシリーズ
5	「モモ」 作：ミヒャエル・エンデ	

＜１年生＞（方法）　読み聞かせ

絵が特徴的でおもしろく、文章が適当な長さであっ

たため、１年生でも集中して楽しめると考え、本書を選んだ。子どもたちの中には読んだ事がある子もいたが、楽しそうに聞いている子が多かった。

＜２年生＞（方法）　読み聞かせ

ちょうど２年生くらいの時に一人で買い物をする「はじめてのおつかい」を経験するのではないかと考え、本書を選んだ。どの子も集中して、「はじめてのおつかい」を見守っていた。

＜３年生＞（方法）　読み聞かせ

図書館の「おすすめの本」として選ばれていた本でもあり、図書館にシリーズも揃っていたため、本書を選んだ。実習Ⅰでの経験を生かし、ティラノサウルスと「ウマソウ」のやり取りの場面を工夫して読んだところ、子どもたちの反応か大変よかった。

＜４年＞（方法）　読み聞かせ

４年生で都道府県名の学習をすることから、楽しんで都道府県名を覚えることは出来ないかと考え、本書を紹介した。駄洒落が登場するたびに、子どもたちの顔に笑みが浮かぶのが印象的だった。

＜５年＞（方法）　ブックトーク

「時間の花」のイラストを見せ、紹介をした。実習Ⅰでの反省を生かし、紹介の内容を変えたところ、子どもたちの反応がよかったように感じた。

②　授業づくりの内容

＜教材研究のねらい＞

実習Ⅰ・Ⅱにおいて、教材研究の重要性を痛感した。子どもの知的好奇心を刺激し、学ぶ意欲を高めるためには、教師が１時間の授業の中に、子どもたちが疑問や驚き、楽しい、やってみたいなどの思いを持つ場面を作り出すことで、子どもたちの可能性の扉は開いていくのではないかと考えた。そのためには、教材研究の質を高め、教材を深める必要がある。そこで、実習Ⅲでは教材研究の方法に焦点をあてた。

指導教員と一緒に教材研究をさせていただいたり、模擬授業で具体的な場面を想定し、子どもたちの反応を予測しながら授業を組み立てた。特に、子どもの発言を予測する場面では指導教員と徹底的に予測を重ね、それに対する切り返しの方法や説明の方法についてもシュミレーションを重ねた。

＜机間指導における子どもとのかかわりのねらい＞

指導教員は机間指導の際に、周りの子どもたちにも聞こえる大きな声で「しっかり考えているね」「いっぱい書いてるね。すごい。」など子どもを認め、褒める声かけをする場面が多くあった。褒められた子どもの表情はふっと和らぎ、中には小さくガッツポーズをする子どももいた。そして「もっと頑張ろう」という意欲が強くなったように感じた。それを聞いていた周りの子どもたちもさらにやる気を高め、学級全体の授業への集中度が高くなったように感じた。このようなかかわりも子どもたちとの大切なかかわりであることを感じた。先生から認めてもらえた、褒めてもらえたという思いは、自信につながると考え、机間指導の際、子どもたちへの声かけを実践した。

５　教師力向上実習の成果と課題

(1)　特別活動・学級活動から

①　今日のスケッチ

＜成果＞

「今日のスケッチ」に関するアンケートを行ったところ、次のような結果が得られた。

＜１クール終了時　５月７日５限　全３１名＞

質問項目	はい	いいえ	無回答
自分から進んで目標に取り組めた	２８	2	1
自分の目標に近づくことができた	２６	2	3
自分にできることが増えたと思う	１８	１１	2
これからも目標に向かって頑張りたい	２８	0	3

＜２クール終了時　５月１７日給食後　全３１名＞

質問項目	はい	いいえ	無回答
自分から進んで目標に取り組めた	２８	2	1
自分の目標に近づくことができた	２７	3	1
自分にできることが増えたと思う	１９	１２	0
これからも目標に向かって頑張りたい	３０	0	1

このことから、多くの子どもが自分の目標に向かって前向きに取り組んでいることが分かる。また、１クール目よりも２クール目の方がほとんどの項目において肯定的な回答が増えていることから、実践によって、子どもの意欲が高まっているといえる。また、２週間目標に取り組んだ感想の中には、

児童Ｒ：「今日のスケッチをやって前よりも明るくなった。」

児童Ｓ：「頑張ればできるということを一生忘れないと思います。」

児童Ｔ：「僕は、今日のスケッチがあったから、やれなかったことがやれるようになったと思います。」

といった、これまでの自分の成長を自分自身で感じている子どももいるように感じた。子どもたちの中には「また今日のスケッチやりたい」と笑顔で話す子どももおり、楽しんで目標に向かって取り組み、様々なことに挑戦する楽しさを感じていた子どもも多かったように思う。これをきっかけに、「自分にもできる」という自信を持つことができた子も多いように感じた。

＜課題＞

子どもたちの目標が多岐にわたることから、個々の目標を把握することが難しかった。２クールめの目標を立てる際に条件を設けたが、１クールめで習い事や家でのお手伝いなどを目標にしていた子が、継続して続けることができなかったたことが残念であった。また、条件から外れた目標を立てたり、途中で目標の内

容が変わる子どももいた。どこまでの条件を与えれば子どもたちが意欲的に取り組むことができるか、課題が残った。

目標は、具体的に立てるよう促したが、抽象的な目標も多かった。そのような児童には声を掛け、具体的な目標を一緒に考えるなど、個別に対応したが、全員に指導をすることは時間的に不可能であった。より具体的な目標をどのように立てさせるかが課題である。

ワークシートを記入しない子や、自己評価で「できなかった」に丸をつけた児童に対しての支援が不十分であった。個々の毎日の取り組みの様子をすべて把握することは不可能なので、どの程度まで教師側が把握するべきなのかの見極めが難しいと感じた。

②　ピカピカの木

＜成果＞

１人の「できるようになったこと」で木は完成するのではなく、クラス全員の「できるようになったこと」が集まって木はピカピカ光り完成するのだ、ということを子どもたちに伝えたことで、他者の成長を喜びあったり、「クラスみんなで頑張ろう」という意欲につながったと感じた。また、「ピカピカの木」の鑑賞会を行ったことで、友達が目標に向かって頑張っている姿を見て刺激を受けた児童も多く、次の目標設定に生かそうとしたり、「私も頑張ろう」という意欲が高まったと感じた。

＜課題＞

目標達成ができず、葉や花にできるようになったことが書けない児童には、頑張って取り組んだことを書くように指示したが、それも思い浮かばない児童にはどう支援したらよいのか、課題が残った。

(2)　教科指導・授業実践から

＜成果＞

・　教材研究の重要性

実習を通して、教材研究の質が授業の質を大きく左右することを実感した。教科書の文字やグラフ等をただ教えるだけでは、表面的なことしか教えることができず、その背景に隠された意味や意図に目を向けて教材研究しないと、子どもは本当の意味で思考し、学びあうことができない。授業のねらいを軸に、それを達成するための発問の仕方や効果的な教材の見せ方等についても考えていかなくてはならないと感じた。実習では、指導教員と共に教材研究をさせていただいたことで、自分では気がつかなかった教科書の背景の部分（なぜ、ここにこの問いがあるのか、この式は何を意味しているのか)にも目を向けることができた。また、模擬授業を行ったことで、実際の授業の際に落ち着いて子どもの発言を聞くことができた。また、自分を客観的に見ることができ、指導案上では気がつかなかったミスや不足に気がついたり、自分の説明が不十分であったこと、言葉に無駄が多いことに気がつき、授業の流れを整理することができた。

実際、学校現場は多忙であり、毎日の授業の教材研究の時間を十分に確保することは大変難しいと考える。しかし、指導教員は限られた時間の中で、授業のめあてに迫るための教材研究を行い、授業の流れを組み立てて毎日の授業に臨まれていた。その背中から指導教員の授業に対する真摯な姿勢を強く感じ、大変感銘を受けた。子どもたちにとってその単元のその授業は一度きりである。その一度きりの授業の中に、子どもたちの好奇心を揺さぶる素材を入れることで、子どもの可能性の扉は開くかもしれない。そのことを肝に銘じ、私もしっかりとした教材研究を行い、真摯な態度で授業に臨むことが出来る教師になりたいと考える。

・　授業中における子どもとのかかわり

授業の中に子どもが活動する場面を作る大切さを実感した。たとえ、教えることが中心の授業でも、声に出して確認させたり、考え方を問い返したりすることで子どもとのかかわりを作り出せることを学んだ。その際は、教師と子どもとの授業の呼吸をつかむことが授業にテンポを作り出すことを学んだ。また、授業に集中できない子や学習が遅れがちな児童を意図的に授業に参加させる場面を作ることも重要なことであると学んだ。また、子どもとの関係は机間指導の中でも作りだすことができると感じた。机間指導での、教師の声かけによって子どもは自分の意見や答えに自信を持ち、次のステップにつながることを実感した。

＜課題＞

想定外の子どもの発言が出たときに、焦ってしまうことがあった。そのような場合にも落ち着いて問い返しが出来るようになりたい。また、指示が曖昧になってしまう場面があったため、指示を明確に出せるよう心がけたい。

(3)　おすすめの本の紹介から

＜成果＞

子どもたちは本の紹介中､大変集中して聞いており、興味を持って耳を傾けているようであった。また、私が、絵に注目させると、絵とお話を対応させながら聞いている様子が伝わってきた。また、紹介した本を実際に手に取る子どももいた。ある児童は、「この前、図書館で、先生が紹介してくれた『モモ』を見つけたよ。今､読んでいる本を読み終えたら､借りてみるね。」と笑顔で話してくれた。以上のことから､本に親しみ、興味を持ったり、関心の幅が広がった子どももいるといえる。

＜課題＞

限られた時間の中でいかに効果的に子どものたちに紹介できるかが難しいと感じた。絵本によっては長いお話の場合もあるため､時間的に紹介が難しかったり、低学年の場合、集中力が続かなかった子どもたちもいた。そのため、所々で子どもたちに活動させる場面を

設けたりすると、より楽しんでお話を聞くことができたかもしれない。ブックトークは、どこまでお話の内容を話せば、子どもたちが「読みたい」と感じるのかを捉えることが難しかった。また、どうしても本を読むことに必死になり、子どもたちの表情や反応を見ながら読み聞かせをすることが出来なかった。もっと余裕をもって子どもの表情を確かめながら読み聞かせが出来るようになりたい。

Ⅳ　教師力向上実習から学んだこと

１　「一人ひとりの可能性を引き出す指導」とは

実習を通して、私は、子どもたちの周りに成長の可能性になりうる興味・関心の「種」を蒔くことが、子どもたちの可能性を引き出す方法の一つなのではないかと考えた。言い換えると、子どもが可能性を見つけることができる環境を創り出すことが子どもの可能性を引き出すことにつながる、ということである。子どもの知的好奇心を刺激したり、自分を肯定的にとらえる視点を与えていくことで、子どもたちはこれまで見えていた世界の何倍も、何十倍もの視野を広げていくことができる。教師が蒔いた「種」がきっかけとなって、興味・関心の芽を育て、可能性という葉が無限に広がっていく。つぼみをつけ、花を咲かせるのは子どもたち次第であるが、基本は教師の「種」である。教師は、成長の可能性の「きっかけづくり」をすることで、子どもたちが花を咲かせることができるよう、常に寄り添い、見守り、信じることが一人ひとりの可能性を引き出す指導につながると考える。

２　目指す教師像

私は、子どもたちの視野を広げることができる教師になりたいと考える。実習を通して、子どもたちは自分の知っている世界から一歩外の世界へ出ることを抵抗なく受け入れることができるように感じた。このような柔軟な感性を持つ時期に、子どもたちの興味・関心の扉を開くような教材を準備したり、子どもたちの知的好奇心を刺激する学習材に触れさせることで、子どもたちの「もっと知りたい」「やってみたい」を引き出すことが出来る教師になりたい。そして、子どもの想いに、そっと背中を押してあげられるよう、常に子どもに寄り添い、子ども研究がしっかりできる教師になりたい。そのために、まず私自身が常に学び続ける姿勢を持ち、自分自身の視野を広げることが大切であると考える。そして、一つひとつの言葉に魂を込めるように、熱意をもって子どもに伝えることで、子どもたちにもその思いは伝わると考える。子どもは教師の背中を見て育つ。私の背中を大きくするために、人間としての幅を広げ、人間性を豊かにするために自己研鑽し続ける教師になりたい。そして、子どもの中にある可能性の鼓動を感じながら、子どもが伸び伸びと自分の可能性に挑戦していけるよう寄り添っていきたい。

私は、今、大学院での学びを終え、春から教壇に立とうとしている。これまで自分が歩んできた道を振り返ると、決して楽しいことばかりではなかったように思う。しかし、そこにはたくさんの方々との出会いがあり、その方々の支えがあったからこそ、今の自分があることに気がつく。これから始まる「小学校の先生」としての生活。それは、私の夢だった。しかし、それは決して自分一人の夢ではなく、これまで支えてくださった方々の想いや願いの詰まった大きな夢となった。このことを忘れず、いつも前を向いて進んでいきたい。

【付記】

連携協力校の校長先生をはじめ、ご指導いただいた先生方には大変お世話になりました。また、実習校では多くの先生方に、お忙しい中、温かいご指導をいただき、心から感謝申し上げます。

【主な参考文献】

- 細水保宏『算数のプロが教える授業づくりのコツ』（東洋館出版社，2009）
- 小林道正、市川良『こまったときの算数の教え方　４年生』（大月書店，2010）
- 銀林浩、増島高敬他『かけ算とわり算』（日本評論社，2011）
- 板倉弘幸『クラス平均９０点をとる算数授業の原則　中学年』（明治図書，2010）
- 向山洋一他『算数の「かけ算・わり算」がミルミルわかる本』（PHP 研究所，1999）
- 花井清他『言葉・楽器・からだのアンサンブル』（音楽之友社，1997）
- 山崎正彦『見つけよう音楽の聴き方聴かせ方』（STYLENOTE，2012）
- 吉川武彦『音楽科授業の基礎基本』（小学館，2010）
- 渡部康夫『やってみよう読書のアニマシオン』（全国学校図書館協議会，2000）

---

i　中央教育審議会「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」（答申）平成 19 年 1 月 30 日
「第 1 章　今なぜ，青少年の意欲を高め，心と体の相伴った成長を促す必要があるのか」

ii　（財）日本青少年研究所「小学生の生活習慣に関する調査　－東京・北京・ソウルの３都市の比較－」
平成 19 年 3 月発表

iii　（財）日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識　－日本・アメリカ・中国・韓国の比較－」
平成 19 年 2 月発表（ベネッセ HP より）

iv　徐奈美「今日からはじめるブックトーク」（少年写真新聞社，2010 年）